

呉音一音節去声字の上声化の過程

佐々木 勇

目次

- 一、はじめに
- 二、親鸞筆『観無量寿経』に於ける一音節去声字の上声化
- 三、院政時代以前の資料に於ける一音節去声字の上声化
 - I、聖衆来迎寺藏『妙法蓮華経』
 - II、保延本『法華経单字』
 - III、承暦本『金光明最勝王経音義』
- 四、一音節去声字の上声化の過程
- 五、院政時代の和語に於ける一音節去声
- 六、むすび

一、はじめに

所謂呉音の声調資料は、それを大きく二つに分けることができる。

一つには、本文中の漢字に声点・反切注等を加点した呉音直読資料・呉音読訓点資料の類であり、今一つは、掲出字・反切字に声点加点されるか、掲出字の声調に関する注記の見られる辞書・音義の類である。後者の、辞書・音義の類に記された声調は、整理されたもののように見えるが、細かな点については不統一な面が見られる。それは、辞書・音義

に記された声調の背景に、実際の本文を読誦する際の声調が存在する為であろうと考えられる。そこで、呉音声調について考える為には、まず前者の直読資料・訓点資料を扱うことが先決であろうと思われる。とりわけ呉音としての純粋度の高さから呉音直読資料が選ばれる。

その様な呉音直読資料では、同一字の場合によつて異なつた種類の声調を示す声点が加点されることがあり、当該字の呉音声調として複数の声調が存するのは何故か、どの様な過程を経て、当該字が複数の声調を有する様になつたのが問題となる。

当該字が複数の声調を有するものの一つに、一音節字で上声と去声との声調を有する漢字群が有る。所謂呉音に於いては、平安時代後期に去声であつた一音節字は、鎌倉時代中期にはほとんど上声に移行したとされている。⁽¹⁾そして、資料ごとに、去声の字が上声の字となつた割合も報告されている。⁽²⁾しかし、その移行の過程―具体的にどの様な場合から上声となつて行つたのか―については未だ報告されていない様である。この一音節去声字が去声から上声へ移行する声調変化の過程を考えることが、本稿の目的である。

二、親鸞筆『観無量寿經』に於ける一音節去声字の上声化

はじめに鎌倉時代極初期の呉音直読資料である『観無量寿經』⁽³⁾に於ける一音節去声字の上声化について見る。

本資料中の一音節字で、上声と去声の二通りの声点が加点された漢字とその用例は、次に列挙する如くである(用例は資料中の句切り点に依る句の形で掲出する)。

〈上声点加点例〉

I句頭(2字3例)

1 不⁽⁶⁾一⁽⁶⁾不⁽⁶⁾可^(平)禁^(平)制^(去) (4-4)⁽⁷⁾ 不^(上)宜^(上)住^(平)此^(平) (5-5)

2 如—如(上)鉢(上)頭(上)摩(上)華(上) (39-5)

II 句中 (52字 284例)

1 不—一(入)不(上)得(入)往(平) 臣(平)不(上)忍(平)聞(去) 汝(平)不(上)為(上)我邪(5-7) <外13例>

2 如—狀(去)懸(上)如(上)懸(去)鼓(平) 從(去)如(上)意(平)珠(上)王(上)生(去) 猶(去)如(上)天(去)畫(平) (14-4) (20-5) (24-4)

<外6例>

3 俱—千(去)二(平)百(入)五十(入)人(上)俱(上) 千二百五十人(上)俱(上) 无量諸(去)天(上)大衆俱(上) (2-3) (1-3)

4 威—世尊威(上)重(平) (6-5)

5 娑—頻(去)婆(上)娑(上)羅(上) (2-6)

6 希—名章(上)提(上)希(上) (2-7)

7 彌—如(去)須(上)彌(上)山(9-1) 阿(去)彌(上)陀(上)佛所(平) (9-7) 如五(平)須(去)彌(上)山(上) (31-4) <外4例>

8 悲—願(平)興(平)慈(去)悲(上) (3-5)

9 既—華既(上)敷已(53-5)

10 沙—持(去)沙(上)彌(上)戒(52-5)

11 波—諸(去)波(上)羅(上)蜜(入) (21-3)

12 流—水(去)流(上)光(去)明(上) 欲令(去)法音(去)宣(平)流(上) (29-7) (5-8)

13 瑠—映(去)瑠(上)璃地(15-4)

14 祇—偷(去)僧(上)祇(上)物(入) 阿(去)僧(上)祇(上)劫(入) (57-4) (7-1)

15 遊—常(去)遊(上)諸佛(41-3)

16 邪₁猶₁存₁在₁邪₁ (4-2)

17 須₁如₁須₁彌₁山₁ (9-1) 如₁須₁彌₁山₁ (31-5) 如₁須₁彌₁山₁佛₁ (13-3) 逕₁須₁與₁間₁

(46-5)

18 之₁惡₁友₁之₁教₁ (2-5) 心₁之₁所₁念₁ (7-1) 廣₁長₁之₁相₁ (39-4) 所₁能₁知₁之₁

上 (8-1) 外7例

19 何₁我₁宿₁何₁罪₁ (7-7) 云₁何₁當₁見₁ (13-5) 當₁云₁何₁觀₁ (24-1) 外4例

20 修₁欲₁修₁淨₁業₁者₁ (10-7) 當₁修₁三₁福₁ (11-2) 戒₁香₁熏₁修₁ (52-7)

21 其₁怒₁其₁母₁曰₁ (4-5) 欲₁害₁其₁母₁ (4-7) 令₁其₁蓮₁華₁ (24-3) 遍₁其₁

寶土 (26-1) 外8例

22 持₁受₁持₁三₁歸₁ (11-3) 汝₁持₁佛₁語₁ (17-1) 憶₁持₁不₁失₁ (42-3) 汝₁好₁持₁是₁語₁ (63-3)

外2例

23 於₁觀₁於₁西₁方₁ (12-5) 想₁於₁西₁方₁ (14-1) 如₁於₁鏡₁中₁ (26-7) 皆₁於₁中₁現₁ (35

2) 外8例

24 无₁心₁眼₁无₁郭₁ (10-3) 苦₁空₁无₁常₁ (16-3) 无₁常₁无₁我₁ (21-3) 名₁无₁邊₁光₁ (38

7) 外7例

25 時₁一₁時₁佛₁在₁ (2-2) 爾₁時₁王₁舍₁大₁城₁ (2-4) 在₁昔₁之₁時₁ (6-4) 外12

例

26 爲₁與₁賊₁爲₁伴₁ (4-6) 汝₁不₁爲₁我₁邪₁ (5-7) 名₁爲₁淨₁業₁ (11-5) 廣₁爲₁多₁衆₁ (12-4)

外16例

27 羅—頻(去濁) 婆(上濁) 娑(上濁) 羅(上) (2-6) 是梅(去) 陀(上濁) 羅(上) (5-5) 諸(去) 波(上) 羅(上) 蜜(入) (21-3) <外14例>
 28 華—坐(平濁) 百寶(平) 蓮(去) 華(上濁) (7-4) 雜(入濁) 華(上) 雲(平) (26-2) 坐(平濁) 彼華(上) 上(上) (28-4) <外19例>
 29 諸—制(去) 諸(上) 群(去濁) 臣(上濁) (2-6) 其諸(上) 寶樹(17-7) 攝(入) 諸(上) 衆(去) 生(33-1) <外19例>
 30 陀—毗(去濁) 陀(上濁) 論(平) 經(上) 說(5-2) 三(去) 藐(入) 三(去) 佛(入濁) 陀(上濁) (28-2) 阿(平) 難(去) 陀(上濁) (①-6) <外>

10例

31 多 (8 <以下複数の場合に用例数のみを記す>) 32 初 33 和 34 富 35 微 (3) 36 思 (2) 37 恭 38 慈 (2) 39 拘
 40 池 (4) 41 無 (2) 42 知 (6) 43 置 44 耆 45 菩 (5) 46 除 (2) 47 離 (2) 48 雨 49 頭 (4) 50 五 (7)
 51 指 52 紫 (3)

<去声点加用例>

I句頭 (42字102例)

1 不—不(去) 令(上) 復(平濁) 出(入) (6-2)
 2 如—如(去) 是(平濁) 我(平濁) 聞(去) (2-2) 如(去) 鷹(上) 隼(平濁) 飛(平) (3-5) 如(去) 須(上) 彌(上) 山 (9-1) <外5例>
 3 俱—俱(去) 時放光明 (48-4) 俱(去) 會(平) 一(入) 處(平) (⑧-3)
 4 威—威(去) 儀(上濁) 无缺(入) (52-6)
 5 娑—娑(去) 羅(上) 樹王(去) 佛 (⑬-2) 娑(去) 婆(上濁) 國土 (⑮-7)
 6 希—希(去) 有之事 (⑮-7)
 7 彌—彌(去) 覆(平) 樹(平濁) 上 (18-4)
 8 悲—悲(去) 泣(入) 雨(去) 淚(平) (6-6)

9 既—既(去) 見日已(14-4) 既(去) 見水(上) 已(14-6)

10 沙—沙(去) 門(上) 目(入) 連(去) (4-3)

12 流—流(去) 注(平濁) 華(去) 間(上) (21-2) 流(去) 出八万四千種(平濁) 光明(35-5)

14 祇—祇(去濁) 樹(平濁) 給(入) 孤(上) 獨(入濁) 園(去) (1-2)

15 遊—遊(去) 歷十万(50-5)

17 須—須(去) 彌(上) 相佛(9-6)

18 之—之(去) 所能(去) 知(上) (7-4)

19 何—何(去濁) 等因(去) 緣(上) (8-1) 何(去濁) 況(平) 有實(5-7) 何(去濁) 故名(去) 爲(上) (14-1)

20 修—修(去) 多(上) 羅(上) 合(入濁) (30-1) 修(去) 諸(上) 三(上) 昧(49-1) 修(去) 行(上濁) 諸(去) 戒(51-3)

21 其—其(去濁) 光(上) 金(去) 色(8-7) 其(去濁) 幢(上濁) 八(入) 方(去) (15-2) 其(去濁) 摩(上) 尼(上) 水(上) (21-2) 〈外4例〉

22 持—持(去濁) 用上王(4-3) 持(去濁) 金(上) 蓮(上) 華(上濁) (49-6) 持(去濁) 八戒齋(平) (51-3) 持(去濁) 沙(上) 彌(上) 戒(52-5) 〈外3例〉

—5) 〈外3例〉

23 於—於(去) 王(上) 宮(上濁) 出(7-2) 於(去) 衆(上) 葉間(去) (19-2) 於(去) 七寶地上(24-2) 〈外9例〉

24 无—无(去) 由(上) 得(入) 見(平) (6-5) 无(去) 生(上) 法(入濁) 忍(13-1) 无(去) 分(平濁) 散(平濁) 意(平) (14-6) 〈外2例〉

25 時—時(去濁) 目捷連(3-5) 時(去濁) 阿(平) 闍世(4-1) 時(去濁) 韋提希(6-2·7-3)

26 爲—爲(去) 王(上) 說法(入) (3-7) 爲(去) 王(上) 作禮(5-1) 爲(去) 煩(上濁) 惱賊(12-2) 爲(去) 其(上濁) 勝(平) 友(上) (63-2)

—2)

27 羅—羅(去) 暎(上濁) 羅(上) (1-6)

28 華—華_(去)上自然_(19 | 3) 華_(去)上皆有_(58 | 4)
29 諸—諸_(去)波_(上)羅_(上)蜜_(入)_(21 | 3) 諸_(去)蓮_(上)華上_(29 | 6) 諸_(去)莊_(上)嚴_(上)事_(36 | 2) 諸_(去)寶行_(平)樹₍₆₎

—1—

30 陀—陀_(去)羅_(上)尼_(上)門_(上)_(46 | 7)

31 多₍₃₎ 33 和 35 微₍₃₎ 37 恭 38 慈 40 池₍₂₎ 41 無₍₂₎ 42 知 44 耆 45 菩 46 除₍₂₎ 47 離 48 雨 49

頭 50 五

II 句中 (33 字 64 例)

2 如—其光_(上)如_(去)華_(上)_(15 | 6) 其光_(上)如_(去)蓋_(上)_(25 | 1)

3 俱—一時_(上)俱_(去)至_(57 | 7) 同_(去)時_(上)俱_(去)作_(平)_(6 | 2)

4 威—不犯_(平)威_(去)儀_(上)_(11 | 3)

7 彌—莫_(入)不彌_(去)滿_(上)_(37 | 1)

11 波—橋_(去)梵_(平)波_(去)提_(上)_(1 | 6)

13 溜—作溜_(去)璃_(上)想_(14 | 7) 擊_(平)溜_(去)璃_(上)地_(15 | 2) 金_(去)銀_(上)溜_(去)璃_(上)_(3 | 5)

16 邪—名爲邪_(去)觀_(平)_(17 | 4)

17 須—如五_(平)須_(去)彌_(上)山_(上)_(31 | 4) 得須_(去)陀_(上)洹_(上)_(53 | 6)

18 之—雜_(入)色_(去)鳥_(上)_(4 | 7) 共命_(平)之_(去)鳥_(上)_(5 | 1) 尚_(去)無_(上)三_(去)惡道_(去)之名_(上)_(5 | 7)

19 何—彼土何_(去)故_(2 | 7) 彼佛何_(去)故_(6 | 5)

21 其—以爲_(上)其_(去)臺_(上)_(25 | 2) 勸_(平)進_(平)其_(去)心_(上)_(46 | 1) 充_(去)滿_(平)其_(去)中_(上)_(3 | 4) 現在其

(去濁)前(上濁) (9-1)

22 持―即是持(去濁)无(上)量壽佛名(上) (63-3)

24 无―心得无(去)疑(上濁) (17-3) 及无(去)見頂(平濁)相(平) (37-2) 但發(入)无(去)上道心(上) (49-4) 受苦无(去)

窮(上濁) (59-4)

25 時―如是時(去濁)間(上) (3-7)

27 羅―衆(去)寶羅(去)網(上) (28-6) 七重羅(去)網(上) (3-1) 及寶羅(去)網(6-1)

28 華―百億(入)華(去)幢(上濁) (16-1) 七寶華(去)葉(入) (17-7) 枝(去)葉(入)華(去)菓(20-3) 流(去)注(平濁)華(去)間(上)

(21-2) 是爲(上)華(去)座(平濁)想(26-3)

29 諸―无量諸(去)佛(9-5) 涌(去)生(上)諸(去)菓(19-6) 不遇諸(去)禍(平) (37-5) 修(去)行(上濁)諸(去)戒(51-3) 无

量諸(去)天(上)大衆俱(上) (2-4)

31 多(3) 32 初 33 和 34 富 36 思 38 慈 39 拘 40 池 41 無 42 知(2) 43 置 44 耆(2) 48 雨 50 五(2)

51 指 52 紫(2)

以上、上声点加点例・去声点加点例とも、当該字の句中での位置に注目し、分類して挙げた。

右の諸字は、本資料に於いては、上声と去声との二通りの声調を有する字ということになるが、本資料よりも前の時代の呉音声調を反映すると考えられる呉音声調資料では、去声である事が確かめられる。たとえば、始めの三字「不・如・俱」は、「観智院本類聚名義抄和音」の仮名にはそれぞれ、

不(略) 禾フ(去) (佛上七七二)

如(略) 禾ニ(平)ヨ(上) (佛中六五)

俱(略) 禾ク(志)(佛上三一七)

と声点が加點されており、去声であることが知られる。本来は去声の字であつたと考えられるのである。それらの字に対して、本資料では上声と去声との二通りの声点加點例が見られたのである。

その上声加點例・去声加點例の具体例よりまず知られることは、上声加點例は句頭にはほとんど出現せず、去声加點例は句頭に多く出現するということである。換言すれば、当該字が句中に位置する場合には、多く上声となり、句頭に立つ場合には去声となるのである。すなわち、本資料に於ける一音節去声字の上声化は、どの場合にも一樣に起こつたのではなく、句頭と句頭以外とは、その上声化の様相が明らかに異なるのである。

右の結果から、呉音直読資料に於ける一音節去声字の上声化は、句中より始まり、それが次第に句頭の場合にまで及ぶ様になつたのではないかと予想される。

ところで、上声は句中にしか現われない(例外三例)とすると、他の声調変化の場合を考へて、句中での上声の出現は、ある特定の声調の直後に限られるのではないかと考えられる。しかし、先に列挙した具体例より、直前の字の声調にかかわらず上声が出現することは知られるところである。そこで、直前の字の声調によつて上声化の程度に違いが見られるのかどうかを調べる為に、直前の字の声調ごとに上声となるものと、去声となるものとの例数を見ると、表Iの如くなる。()内は各声調の直後での上声と去声との割合(%)である。①は直前の字の声調、②は当該字の声調。以下同じ。)表Iより、直前の字の声調にかかわらず句中での上声は去声の二倍以上の数を示していることが知られる。ただし、直前の字の声調が去声の場合には、他の場合と較べ、上声となる割合が高いことが指摘できる。同一語の語頭の字であっても、直前の字の声調が去声の場合と、それ以外の場合とでは、声調に違いが見られる様な例も存し、去声と去声との連続は避けられたらしいことが知られる。

表 I

計	入	去	上	平	前
					後
292 (81.0)	36 (66.7)	114 (95.8)	46 (72.0)	86 (74.5)	上
66 (19.0)	18 (33.3)	5 (4.2)	18 (28.0)	25 (22.5)	去
348 (100.0)	54 (100.0)	119 (100.0)	64 (100.0)	111 (100.0)	計

映(去)瑠(上)璃地(15-4)
 擎(平)瑠(去)璃(上)地(15-2)

如(去)須(上)彌(上)山(9-1)
 如(平)須(去)彌(上)山(上)(31-4)

さて、句頭には上声はほとんど見られなかったのであったが、句頭でありながら上声点が加点された三例は、句頭以外で起こった上声化が既に句頭字にまで及んだ例として解釈されるのであろうか。今は例外として保留としておきたい。

また、句中では上声点加点例と共に去声点加点例も33字64例見られた。この33字64例を改めて見るならば、それらの例は句頭以外ではあるが、決して句末ではないということが知られる。この事より、それらの去声点加点例は句中の字ではあっても語頭の字ではなかったかと思われるのである。ここで、この語の観点で用例を見直してみたいと思う。

その際に一語を如何に認めるかということが問題となる。当然親鸞自身の語認識に基づいて作業を進める必要があるが、これは、極めて困難な作業である。今は便宜上親鸞の加点本を訓み下したものととして伝承されている『佛説観無量寿経延書』¹⁰⁾に依って、語認定を行うこととする。用例は先掲のものと重なる為、一々については記さないが、例外二例を除く全例が、次の如くに語頭の字と認定され、語中での去声点加点例は見られない。(一)の下は『佛説観無量寿経延書』

百億(入)華(去)幢(上濁)——百億の華幢

作瑠(去)璃(上)想(去)——瑠璃のおもひをなせ

一時(上濁)俱(去)至(去)——一時にともにいたる

不犯(平濁)威(去)儀(上濁)——威儀を犯せず

名爲邪(去濁)觀(平)——なつて邪觀とす

以下類例五十七例。

このことから、句中ではあつても一語の語頭に当たる字には去声が残ることが有つたことが知られる。

よつて、呉音直読資料の声調を整理する際には、一字だけを取り出して考えたり、直前の字の声調との関係を考えるだけでは不十分であり、一句中に於ける位置と同時に、右の如くに一語中に於ける位置をも考慮しなければならない点
が知られる。たとえば同じ漢字の連続であつても、当該字の語中で位置が異なる為はその声調が違つている次の様な
例も存するのである。

幽閉(去)置(去)於(去)——幽閉して(略)にをく

閉(平)置(上)深(去濁)宮(上濁)——深宮に閉置して

次に、これまで考察の対象から外して来た去声点加例だけの一音節字、上声点加例だけの一音節字について見て
みたい。

去声点加例のみの一音節字は、本資料に於いて14字30例見られるが、それらの例はいずれも、句頭字であるか句中
ではあつても語頭の字であり、先の分析結果と一致する。また、上声点加例のみの一音節字は、57字94例見られる。
それらは総て句中での用例であり、これも先の分析結果と一致する。

残る問題として、句中の語頭字でありながら、上声となる字と去声となる字との差異は何か、ということが有ろうか

表 I'

計	入	去	上	平	前
					該
172 (72.9)	21 (55.3)	80 (94.1)	15 (45.5)	56 (70.0)	上
64 (27.1)	17 (44.7)	5 (5.9)	18 (54.5)	24 (30.0)	去
236 (100.0)	38 (100.0)	85 (100.0)	33 (100.0)	80 (100.0)	計

と思う。この問題についての明確な解答を得ていないが、一つには直前の字の声調が関係しているのではあるまいか。先に去声の直後では、上声化が起こりやすいことを述べたが、この点は句中の語頭字に限っても変わらない。今、句中の語頭字に限って、表 I' と同様の表を作製すれば表 I' の如くになる。

その外の原因として、一語としての定着度の差を考慮することができる。定着度の高い語は、どの様な場合にもその語としてのアクセントで実現される事が予想されるからである。現段階ではこの点について十分な考察ができておらず、後者にまらしたい。¹²⁾

以上、本資料の分析より知られた点は次の様にまとめられる。

一、一音節去声字の上声化は、句中の字から始まったと予想される。

中でも去声字の直後に位置した場合には、上声化が起きやすい。

二、句中であっても語頭字では去声をとどめる場合がある。

三、院政時代以前の資料に於ける一音節去声字の上声化

鎌倉時代極初期の親鸞の資料に於いては、本来の一音節去声字が、相当数句中では上声に移行していた。しかし、院政時代以前の資料では、上声に移行した例が少なくなることが予想される。そして、その上声化がどの様な場合から始まっているかを調べることによって、一音節去声字の上声化の過程を逆に辿って行くことが出来ると考えられる。以下、時代を遡る形で一音節去声字の上声化の過程について考えてみたい。

I、聖衆來迎寺藏『妙法蓮華經』⁽¹³⁾

まず、院政時代末期の吳音直読資料である本資料について同様の分析を行ってみたい。以下に先と同じ方法で用例を掲げる。上声点加声例・去声点加声例を共に有する一音節字の例である。

〈上声点加声例〉

I句頭(4字4例)

娛―娛(去濁)樂(入)之具(二)220⁽¹⁴⁾

都―都(去)不(上)見(平)汝(二)464

婆―婆(去濁)稚(上)阿(去)修(上)羅(上)王(上)(一)37

不―不(去)以(平)爲(去)喜(平)(一)106

II句中(61字194例)

娛―觀娛(上濁)樂(平濁)著(二)264

婆―賊(入濁)陀(上濁)婆(上濁)羅(上)菩薩(二)22 有四乾(去濁)闍(入濁)婆(上濁)王(上)(一)34 頻(平)婆(上濁)羅(上)(七)236

4例

不―十(入濁)八(入)不(上)共(平濁)法(入)(二)23 如(去)來(上)不(上)欺(上濁)誑(平)(二)412 豈(去)得(入)不(上)説(一)329

7例

阿―若阿(上)跋(入濁)摩(去)羅(上)(八)195 一名阿(上)闍在觀喜國(三)453

爲(3)〈以下複数の場合に用例数のみを記す〉醫(3) 羅(21) 於(4) 伽(3) 迦(5) 河(2) 華(8) 其

(3) 衆(7) 諸(11) 塗(2) 多(4) 如(2) 無(8) 油(8) 疑(7) 憂 駕 鬼 宜 幾(2) 丘(2)

求 牙(2) 飢 炬(2) 欺(2) 庫 枯(2) 思 之(3) 車(2) 闍(3) 灑(2) 周 殊 除(3) 龜

踈(3) 頭(2) 通(3) 置(2) 稚(4) 尼(3) 而奴波(2) 菩魔摩(4) 耶螺(4) 裸流
驢 和

〈去声点加点例〉

I 句頭(40字81例)

娛―娛(去濁) 樂(入) 之具(六285) 娛(去濁) 樂(入) 快(平) 樂(入) (八373) 娛(去濁) 樂(入) 之具(二220)

都―都(去) 不覺知(四101) 都(去) 不(上) 見(平) 汝(二464)

婆―婆(去) 師(上) 迦(上) 華油燈(八209) 婆(去濁) 稚(上) 阿(去) 修(上) 羅(上) 王(上) (一37)

不―不(去) 肯(平) 信(平) 受(平) (二132) 不(去) 能(上) 暫(平) 捨(平) (二322) 不(去) 能(上) 曉(去) 了(平) 此(平) (二508) 〈外3例〉

阿爲(4) 於(4) 迦華其(2) 衆(2) 諸(3) 多(5) 如(9) 無(2) 駕鬼宜求牙飢

庫枯思周(3) 殊除踈頭(2) 置稚尼而(4) 奴(4) 波摩螺裸流和

II 句中(43字84例)

娛―五欲娛(去濁) 樂(入) (六410) 在中而娛(去濁) 樂(入) (六437)

阿―皆是阿(去) 惟(上) 越(入) 致(上) (五144) 毗(去濁) 摩(上) 質(入) 多(上) 羅(上) 阿(去) 修(上) 羅(上) 王(上) (二38) 〈外4例〉

醫―飲食醫(去) 藥(入) (五256)

羅―真(去) 珠(上濁) 羅(去) 網(上) (二289)

爲於河華(2) 其(3) 衆(5) 諸(9) 塗(4) 如無(6) 油(2) 疑(2) 憂幾丘(2) 求

(2) 牙炬欺(2) 庫枯思之(2) 車闍灑(2) 周除(3) 鹿(2) 通而波(3) 菩魔

摩螺流驢

以上、右の用例から知られる通り、本資料に於いても句頭字に対する上声点加点例は四字四例見られるのみである。し

か、その四例はいずれも去声点と共に加點されている例である。これに対して、去声点は、句頭にも相当数見られる点も、先の親鸞の資料と同様である。

表 II

計	入	去	上	平	前
					後
202 (70.4)	32 (66.7)	53 (98.1)	62 (67.4)	55 (59.1)	上
85 (29.6)	16 (33.3)	1 (1.9)	30 (32.6)	38 (40.9)	去
287 (100.0)	48 (100.0)	54 (100.0)	92 (100.0)	93 (100.0)	計

のである。

ここで句中の例について、当該字の声調と直前の字の声調との関係をまとめると表 II の如くなる。

呉音一音節去声字の上声化の過程

次に句中に於ける去声点加點例 43 字 84 例について見る。これらの例は先の検討結果から、句中ではあつても語頭の字であることが予想される。ここでも語の認定基準が問題となるが、法華經訓点資料に依つて語の認定を行うと次の如くであり、例外の二例を除き、他は総て語頭字と判断される。

五欲娛_(去)樂_(入)——五欲をもて娛樂し

皆是阿_(去)惟_(上)越_(入)致_(上)——皆是れ阿惟越致なり

不_(去)以_(平)爲_(去)喜_(平)——爲を以(て)喜(は)不

飲食醫_(去)藥_(入)——飲食と醫藥とに

真_(去)珠_(上)羅_(去)網_(上)——真珠(の)羅網を

以下類例七十七例。

〈例外〉

摩_(平)訶_(平)波_(去)闍_(上)波_(去)提_(上)比_(平)丘_(上)尼_(上) (一一)

若阿_(上)跋_(入)摩_(去)羅_(上) (八 195)

右の例外二例は音写字であり、除外して考えられるであろう。すなわち本資料に於いても「句中であつても語頭字では去声をとどめる場合が有る」と言える

表IIより、先の親鸞の資料と同様、句中では直前の字の声調にかかわらず上声が多いことが知られる。また、本資料でも直前の字の声調が去声の場合は、去声以外の場合と比較して、当該字が上声となる割合が高いことが指摘できる。ただし、句中に於ける上声字全体の割合は七割強であり、表Iの場合よりも一割程度少なく、より古い資料では句中に於ける上声化の程度が低くなることがわかる。

最後に、これまで言及しなかった去声点加点例のみの一音節字、上声点加点例のみの一音節字に注目する。去声点のみが加点された一音節字は、本資料中に82字130例見られるが、全例が、句頭あるいは語頭の字である。また、去声点加点例が存せず、上声点のみ加点された例が、80字147例存する。このうち2例を除く145例は、総て句中での用例であり、共に先の結果と符合する。句頭の上声点加点例は次の2例である。

咀^(上)嚼^(平) 踐^(平) 蹋^(入) (二237)
 珠^(上) 交^(上) 露^(去) 慢^(去) (一124)

この2例は、上声化が既に句頭字にまで及んだ例として解釈されるのであろうか。⁽¹⁶⁾

以上、本資料の分析を通して前節の終わりにまとめたことを確認することができた。

II、保延本『法華経单字』

『法華経单字』は卷音義であり、その掲出字の声点は、法華経本文の読誦音を反映していると考えられる。⁽¹⁷⁾そこで、『法華経单字』の掲出字のうち、一音節字で上声または去声の声点が見られる字を抜き出し、対応する法華経の本文に照合し、本文中の位置と掲出字の声調とによって、前二資料と同様に分類すれば、以下の如くである。⁽¹⁸⁾（陀羅尼・音写字は除く。）

へ上声点加点字

I 句頭

(該当字なし)

II 句中 (66字)

時⁽²⁾——一時佛住(一2)。俱(3)——萬二千人俱(一3)。慈(11)——以慈脩身(一16)。跏(18)——結
跏趺坐(一45)

於(以下出現順に当該字のみを記す)・不・爲・威・雨・于・議・求・瑚・除・魔・祇・夫・家・璃・梨・歸・既・遇・
遊・宜・麻・葦・河・慮・篋・牛・衢・置・糞・斜・褌・柘・狸・鼠・埵・駝・陋・疽・灑・膩・兒・油・務・蔗・
祖・與・酒・裏・戸・炬・違・私・蒹・詈・漁・慕・篩・孤・爐・踈・鏤

〈去声点加點例〉

I 句頭 (35字)

如(1)——如是我聞(一2)。無(4)——無復煩惱(一4)。其(5)——其名曰(一5)。靡(20)——靡不周
遍(一53)

持(以下出現順に当該字のみを記す)・眉・微・奴・車・宮・初・豈・璫・歌・鳴・奇・互・駕・愚・烏・蜈・守・屎・
狐・咀・魑・窺・書・都・貿・資・且・屠・誤・斗

II 句中 (35字)

扱(114)——相扱相撲(五189) 思(23)——是不可思議(一62) 婢(29)——奴婢車乘(一91) 知(8)——如
是衆所知識(二10)

之(以下出現順に当該字のみを記す)・修・圍・非・周・悲・憂・加・枝・佳・九・欺・馳・妹・娛・攄・枯・楚・驢・
吏・左・悒・巨・荷・蒲・蒹・姨・窳・宏・牙・枷・珂

右の結果は、先に實際の本文に加点された資料の分析より得られた結果と符合する。ただし、本資料には、句頭での上

声点加點例は見られず、一音節の上声字は句中にのみ見られる点で徹底している。また、去声加點例のうち句中のものに例として記した「扱・思・婢」の三字の如く、語中の字と判断される例が見られる。⁽²¹⁾ 先の二資料では、句中での去声は、語頭字にのみ見られたのであった。これらの先の二資料との相違は、『法華經單字』が保延頃の吳音声調を反映している為に見られるものと考えられる。⁽²²⁾ 院政時代初中期の法華經読誦の場では、一音節の上声字は句中にのみ見られ、

表III

計	入	去	上	平	前	該
					上	去
33	10	14	1	8	上	
16	7	1	2	6	去	
49	17	15	3	14	計	

一音節去声字は語中にもまだ残っていたものと思われる。

次に直前の字の声調との関係について考える。法華經本文中に於ける当該字の直前の字が『法華經單字』に於いても当該字の直前に掲出されている例について一すなわち読誦の際に連続して読まれた字が、本資料に於いても連続して掲出されている例について一当該字と直前の字の声調を調べると、表IIIの如くなる。(ただし、本文に於ける直前の字が入声の場合は全例を取った。また、例が少ない為、用例数を記すに止め、百分率は出さない。)

得られる用例数が少なく、判然としないが、去声調の直後では上声化しやすということと言えそうである。

III、承暦本『金光明最勝王經音義』

承暦三年(一〇七九年)抄の奥書を持つ本資料もまた卷音義である。本音義の掲出字のうち上声加點例は十八例のみであり、音訳字・陀羅尼字を除けば十例に減る。そのうち一音節字は「鶴・杞・柿・杵・黎」の五字である。この五字について本音義での上接掲出字と最勝王經本文(西大寺本に依る)⁽²³⁾とを対比して記すと次の通りである。

(上接字) (当該字) (最勝王經本文)

鳩 鵲 鳥与鳩鵲鳥 (卷一)

苟 杞 苟杞根(苦頭) (卷七)

擣 篩 一處擣篩取其香末 (卷七)

斧 杵 長杵鐵輪并縞索 (卷七)

黔 黎 常以正法施化黔黎 (卷十)

当該字はいずれも句中の字であり、かつ語中の字であると判断される。「鵲」「杞」「黎」の三字は上接掲出字の「鳩」「苟」「黔」にそれぞれ去声点加て点されている。また、「杵」の最勝王經本文に於ける上接字「長」は本音義中に声点加て点例は見られないが、『法華經單字』の掲出字には去声点加て点されており、「長」も去声として実現されていたと考えられる。本音義に於いても、去声の直後では上声化が起こりやすいと言えよう。残る一例「擣篩」は平声にくつ上声の例であり、語中の、去声以外の声調の直後での上声化の初期の例であると解釈される。

一方、一音節の去声字は音訳字・陀羅尼字を除いて33例と比較的多い。この33例中に語中の字の例が次の如く9例見られる。

(当該字) (最勝王經本文) (訓読文) (所在)

恥 心懷愧恥 心に愧恥することを懷(き)て 卷三

楚 及以鞭杖苦楚事 及以鞭杖との苦楚の事を 卷二

雅 容儀温雅甚端嚴 容儀温雅にして甚端嚴なるを 卷二

鏤 若受鞭杖枷鎖繫 若鞭杖を受ケ枷鎖イに繫サ(け)ラレテ 卷一

貨 多獲寶貨 多ク寶貨を獲む 卷三

異音一音節去声字の上声化の過程

灑 悉皆散灑 悉ク皆散灑して 卷四

蛆 膿爛蟲蛆不可樂 膿ミ爛レキ、蟲蛆トナリ樂(む)可(から)ず(不) 卷五

暑 寒暑調和時不乖序 寒暑調和にして、時^(トキ)序^(ツリ)を乖かじ(不) 卷六

渚 念者皆與爲洲渚 念する者には皆與に洲渚と爲りたまふ 卷七

保証本『法華經單字』でも三例の語中の去声字を指摘できたが、承暦以前の吳音声調を反映すると考えられる本音義では、語中に於いても上声化しない例の方が多いためである。

四、一音節去声字の上声化の過程

鎌倉時代極初期の親鸞の資料に於いて、一音節の去声字が上声化した例は、大部分が句中の例であることを手懸に、わずかな資料についてはあつたが、時代を遡る形で見えて来た。

『金光明最勝王經音義』『法華經單字』の分析結果より、一音節去声字の上声化は、まず語中字でかつ直前の字の声調が去声の場合から始まったのではないかと考えられる。それが次第に語中の他の声調の直後の場合にも及んで行ったであろうと思われる。ただし、その際に去声以外の声調が一音節去声字の上声化に影響を及ぼしたとは、本稿の分析結果からは考えられない。去声以外の直前の字の声調にかかわらず、語中の字であることが上声化に関係していたのであると思われる。²⁵⁾そして、一音節字の上声化は、句中の語頭字にまで及ぶ様になる。この場合も去声字の直後では上声化しやうい。さらに時代が降ると、本来の一音節去声字は、ついに句頭に於いても上声となり、一音節字は上声、二音節字は去声と分かれることになる。国立国会図書館蔵妙法蓮華經卷二の鎌倉中期朱点では、本来の一音節去声字は79例が上声となつているのに対して、去声は句頭に5例、句中の語頭字に2例をとどめているに過ぎないのである。

これまで見て来た一音節去声字の上声化の過程を簡単に記せば、次の如くなる。

語中字でかつ去声の直後↓語中字（直前の字の声調に拘らず）↓語頭字でかつ去声の直後（ただし句中）↓語頭字（直前の字の声調に拘らず。ただし句中）↓句頭字

五、院政時代の和語に於ける一音節去声

それでは何故に上声化が語中・句中より始まり、語頭・句頭には比較的遅くまで去声をとどめたのが次に問題となろう。一音節去声字の上声化は、当時の和語のアクセント変化の影響による変化としてとらえられている。⁽²⁶⁾ それならばその上声化の過程に於いても当時の和語のアクセントの影響を蒙ったのではないかと考えられる。

金田一春彦博士は『類聚名義抄』の和訓に付された声点を調べた結果、「去声の点は、必ずと言っていいほど、第一拍の文字につけられている。これは、当時の和語のアクセントで、去声点で表記するような音調は第一拍にしか来なかつたことを表わすものと考えられ、当時の和語でも調素の並び方に一定の制限があつたことを推測させる。」と述べられている。⁽²⁷⁾

また、同じく院政時代のアクセントを反映していると考えられている『和名類聚抄』の古写本声点本に於いても、去声点は語頭の文字か、複合語の中にあつての語頭の文字に加点されている。⁽²⁹⁾ このことにより、院政時代の和語に於いては、一音節の去声調は語頭にだけしか存在しなかつたと考えられる。

漢字音に於いて、一音節去声字の上声化が語中・句中より起り語頭・句頭には比較的遅くまで去声をとどめたのは、この様な和語のアクセントの背景が有つた為であろうと考えられる。

六、む す び

一音節去声字の上声化という一事象についての考察ではあつたが、異音声調の分析は当該字一字を抜き出して行うだ

けでは不十分であることが知られた。そしてそれは呉音声調が当時の和語のアクセントと密接な関係を持つものであるからであろうと思われる。

本稿で指摘した事柄は、今後、より多くの資料で確認して行かねばならないであろう。

注

- (1) 沼本克明『日本漢字音の歴史』（東京堂出版）二六二頁。
- (2) 奥村三雄「音節とアクセント——呉音声調の国語化——」（『国語国文』第22巻11号）、高松政雄『日本漢字音の研究』など。
- (3) 上声化が完了しきっていない鎌倉初期という時代と、詳細な加點状況とから本資料が選ばれる。底本は『親鸞聖人真蹟集成 第七巻』（法蔵館）。現在は、『親鸞無量壽経註』・『阿弥陀経註』として二巻に改装されているが、もと一巻であった為、共に扱う。奥書は見られないが、宮崎圓遵氏は『親鸞聖人真蹟集成 第七巻』の解説の中で、建仁く元久頃の成立と推定されている。
- (4) まず上声加點例、去声加點例を共に有する字について、どの様な場合に上声となりどの様な場合に去声となるのかを見るのが有効であろうと思われる。
- (5) 上声加點例の当該字に通し番号を付した。去声加點例の同一字は同一番号である。
- (6) 上声点を以下（上）と記す。他の声調についても同様。また本資料では入声に「急」（舌内入声と促音を示す）と「緩」（開音節化した音を示す）との二種類を区別しているが、ここでは共に（入）あるいは（入濁）として分けない。
- (7) 注（3）書中の所在を示す。上の数字が頁数、下の数字が行数である。頁数を○で囲んだ用例は、現在『阿弥陀経註』と名付けられている部分の用例である。
- (8) 『承暦本金光明最勝王経音義』「圖書寮本、観智院本類聚名義抄の呉音注・和音注」『九条本法華経音』『法華経单字』『安田八幡宮本大般若波羅密多经』等である。
- (9) 去声である資料が多いという意味である。
- (10) 『定本親鸞聖人全集』（法蔵館）に依る。至徳二年書写本（本巻）と康應元年書写本（末巻）が兵庫県川西市火打勝福寺に

伝わると言う。『阿弥陀経註』の部分については、延書の様なものでは伝わらないらしいが、同様な部分が多い為、類推して判断できる。

(11) 上声と去声との両方の声点が加点された「高二(上)十五(去濁)由旬(上濁)」の「五」と梵語音訳字である「憍(去)梵(平濁)波(去)提(上濁)」の「波」とである。

(12) はたして直読の際に語の意識が働いたかどうかといった根本的な問題についても考えてみなければならぬ。少くとも一音節去声字の上声化に関しては、同じく句中の字であっても語頭字であるか否かによって相違が見られたのである。

(13) 本資料は築島裕、小林芳規両博士の移点本を拝借し調査したものである。

(14) 用例は国立国会図書館蔵妙法蓮華経の句切点による句の形で記した。巻数・行数も国会図書館蔵本のものである。

(15) 龍光院蔵妙法蓮華経古點(大坪併治)「訓点資料の研究」、立本寺蔵妙法蓮華経古點(訓点語と訓点資料)「別刊第四」に依る。

(16) 「珠」は「真珠」の語として法華経中に十三例見られ、国会図書館蔵本の声点加例はいずれも上声である。『法華経单字』も「珠」の初出例である。「真珠」の箇所では「珠」の字を掲出し、掲出字声点、反切下位字声点とも上声である。「真珠」などの例を通して当時既に上声として定着していたのかも知れない。

(17) 沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』五〇〇頁・五〇三頁。

(18) 句の認定は国立国会図書館蔵本に依る。

(19) 院政時代以前の呉音直読資料で詳密な声点が加点されている資料を外に見得ていない為、今は卷音義を資料とする。

(20) 古辭書叢刊行會の複製本の頁数。

(21) ただし「婢」の反切下位字は平声である。『前田本色葉字類抄』にも「奴婢」の例で「婢」には平声濁の点が加点されており問題の残る例である。

(22) 試みに先に扱った親鸞の資料の一音節字のうち、上声点または去声点が加点された字について、その初出例の声調を当該字の声調として採ってみると、上声が89字、去声が42字となり上声字が去声字の二倍以上になる。『法華経单字』では去声字の方がやや多いことから、『法華経单字』がより古い時代の声調を反映していることが知られる。

(23) 春日政治『西大金光明最勝王経古點の國語学的研究』に依る。

(24) 前注著書中の訓読文に依る。以下同じ。「擣篩」は「擣シ篩ヒヒヒ」と訓読されているが、『黒川本色葉字類抄』に「擣篩」

(中九ウ 8 タ疊字)として掲出され、国立国会図書館蔵妙法蓮華經にも、「擣ぢ篩す和合」(六69)と資料中に数少ない仮名音注が同時に付されているところから、直読の際には「擣篩」で一語と意識されていたと思われる。

(25) 漢字音に於ける一音節去声字の●十○↓●●という変化に於いて直前の字が上声(●)であることは直接には関係していないということになる。この点、沼本博士の説(注(17)著書四二二頁)と異なる(ただし博士は一音節の去声字が上声の後では多く上声化するといった例を示されていない)。

(26) 注(17)著書、五〇〇～五〇四頁。

(27) 『国語アクセントの史的研究原理と方法』四五・四六頁。

(28) 馬淵和夫編『和名類聚抄古写本文』索引』に依る。

(29) ただし、江戸時代初期写の十巻本系東京大学本(京本)では「加(平)之(去)岐(上)可(上)天(上)」と声点が付点されている。しかし、同じ和訓が『観智院本類聚名義抄』に二例、『鎮国守国神社本類聚名義抄』に一例見られるが、「シ」には三例とも平声点が加点されており、『和名類聚抄』の例に誤写の可能性を考えねばならないであろう。

〔付記〕本稿は昭和六十一年度鎌倉時代語研究会に於いて口頭で発表したものに補筆してまとめたものである。研究会においては、沼本克明博士より有益な御示唆を頂いた。また、稿を成すに当って佐々木峻先生・原卓志氏に御助言を賜り、小林芳規先生には終始暖かい御指導を賜った。ここに記して学恩に謝意を表する次第である。